安全衛生あれこれ 11

増田労働衛生コンサルタント事務所
所長　増田稔久

全国安全週間を迎えて

～正常性バイアスと想定外の罠～

その昔、世の中の怖いことを「地震・雷・火事・親父」と言いました。親父は随分前に失脚し、雷も対処の仕方が分かり、今怖いのは「地震・台風・火事・コロナ」でしょうか？

さて、今年の全国安全週間は、新型コロナウイルスを警戒して各地の説明会や安全大会が中止される異常事態の中で迎えました。科学の進んだ現代社会でコロナの感染がこれほど広がるとは全く想定できませんでした。しかし、安全衛生活動を進める立場で「想定外」と言うのも辛いところです。感染症の歴史、世界のグローバル化、医療の現状を知れば、想定された方もいらしたでしょう。安全管理の原則「過去に起きたことはまた起きる」ことを改めて認識した次第です。

危険に対する甘い評価と対策を怠ることは、私たちが「正常性バイアス」と言われる心理状態に陥ったからと考えられています。正常性バイアスは「自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価したりしてしまう人の特性」のことです。

人は原始、病気に苦しみ動物に襲われながらも命を繋いできました。常時怖がっていては働くこともできません。そんな生活の中から培われた特性は、今も変わらないでしょう。

ひとつ紹介したい書籍が『「想定外」の罠』（柳田邦男著、H23・9、文藝春秋発行）です。これは東日本大震災の後に記されたノンフィクションです。著者は、災害後に想定外であったと言い訳する状況は3種類であると言います。

①本当に想定出来なかったケース

②ある程度想定できたが、データが不確かで、確率が低いとみられ除外されたケース

③発生が予測されたが、その事態に対する対策に本気で取り組むと巨額な資金がいるので、当面起きないだろうと楽観論を掲げて、想定の上限を線引きしてしまったケース

です。著者は、①は殆どなく、大多数が②か③、その間との解説でした。②と③は組織が陥る正常性バイアスとも言えます。今回のコロナは何番でしょうか。

社会、労働の様々な危険への安全対策を検討するには、人が本能的に持つ正常性バイアス、想定外の罠がある前提で進めることが肝要です。また、この罠に対抗し、危険の源を客観的に評価できるのが、リスクアセスメント管理と考えられます。

今年の全国安全週間は、コロナ感染が話題の中心ですが、昨年、一昨年と県下の労働災害による死亡者数が1番多いのは、7月であり、熱中症、暑さが引き起こすヒューマンエラーの対策が重要です。

暑さの中でのマスク使用も職場の事情により合理的な判断が求められるでしょう。各社で有意義な全国安全週間が行われることを願いつつ、改めて医療をはじめ高い感染リスクの中で働く人々に深い感謝を申し上げたいと思います。